

河上肇記念会報

No. 7.

1978. 10.

〒530

大阪市北区梅ヶ枝町一九九（星光ビル）
菅原法律事務所内 河上肇記念会

電話 (06) 三六四一六七七一
振替口座 大阪 三二二一九五

七八年度 総会御案内

秋、いかがお過ごしですか。いよいよ総会の季節になりました。
今年は前京都府知事蠅川虎三先生をお招きして「わが師河上肇先生
の思い出」を語っていただきます。

また来年の生誕百年記念行事について皆さんから種々御意見も承
りたいと思っております。多数御参会の程、お願い申し上げます。

一、日時 一九七八年十一月十二日（日曜）

午前十一時～午後三時

一、場所 鹿ヶ谷 法然院（別図参照）

一、臨時会費 二・〇〇〇円（会場費、昼食費を含む）

同封ハガキで十一月三日までに出欠の御返事を願います。
（二十円切手貼付して下さい）。



1. 乗り物（京都市営バス）

- ◆ 国鉄・近鉄京都駅 → 300番銀閣寺行（法然院町下車）
→ 200番錦林車庫行（浄土寺下車）
- ◆ 京阪四条駅・阪急四条河原町駅 →
32番・47番銀閣寺行（法然院町下車）
- ◆ 京阪三条駅5番 → 岩倉操車場行（浄土寺下車）

第三十二回京大河上祭への御援助に対する御礼

河上肇記念会

世話人代表 住 谷 悦 治

没後三十二年にわたり、一貫して河上精神の継承、普及に大きな貢献をしてまいりました京大河上祭に対し、前号の当会報誌上で御協力、御援助方をお願いいたしましたところ、その趣旨を充分御理解下さり、北海道或は九州など全国五十六名の方々から、二二三、〇〇〇円もの多額のカンパを頂戴いたしました。御蔭をもちまして、第三十二回京大河上祭も盛大無事に終えることができましたことを、御報告申し上げますとともに、衷心より厚く御礼申し上げます。

更に続けられていくであります京大河上祭の充実、発展は即ち、当河上肇記念会のそれともつながる関係を、とくと御認識いただき、今後ともなお一層の御協力の程、伏してお願ひ申し上げます、御礼の言葉にかえさせていただきます。

第三十二回京大河上祭の報告

京大河上祭実行委員会

先回の記念会会報で御紹介いただいたように、京都大学経済学部では河上肇先生を偲びその精神を継承すると共に、民主主義を守り戦前のような暗黒政治の復活に反対することを目的に、「河上祭」を開催してきました。この「河上祭」は、河上肇先生の亡くなった翌年の昭和二十二年から毎年行われ、今年で第三十二回目を迎えました。本年は「学問と現代の危機」という基本テーマのもとに、六月十五・十七・十九日の三日間にわたって開催し、次のような催しを行いました。

六月十五日 京大に近い日本イタリヤ会館で講演会。講演に先だって

記念会会員の松本栄氏に御挨拶いただきました。松本氏は沼津の解放運動老人共同ホームの理事長をしておられます。今回は御主人の松本倉吉氏の代理としていらして、倉吉氏と河上先生の出合いと河上先生に私淑するに至ったいきさつのお話や、私たち学生に対する激励のお言葉などを頂きました。

講演には甲南大学教授の杉原四郎氏と大阪市立大学の林直道氏をお招きしました。杉原氏は「河上肇と資本論」と題して、河上肇先生の代表的な著作「資本論入門」を中心に、河上先生の人柄と先生の「資本論」の解釈について論ぜられ、「資本論」の解釈は大本では今でも河上先生のもので一番すぐれているのではないか、そしてそのことと河上先生の人間性あふれる人柄との関連を考えることが大切であろう、という大きな問題を提出されました。

林氏は「日本経済の現状と諸課題」と題して戦後の日本経済の動き、特に高度経済成長を人口年齢構成にからませて説明するなど斬新な視点から論じ、低成長時代にはいった日本経済の様々な問題を浮き彫りにされました。

会場には熱心にメモをとる聴衆が多く見られ充実した内容の講演会でした。

六月十七日 京大講内にて映画「死刑台のメロディ」上映、暑い最中にも拘らず仲々好評。

六月十九日 京都教育文化センターにおいて「河上祭のゆうべ」を開催し、名古屋大学教授の田口富久治氏をお招きしての講演と、映画の上映とを行いました。田口氏には、「現代民主主義の諸課題」と題して昨今の政治の保守化と民主主義の直面する諸問題を、弁護士抜き裁判法案や京都民主府政の経験などの具体例をあげて論じていただきました。その後、山本宣治の生涯を描いた映画「武器なき闘い」の上映を行い、すべての日程を終了しました。

今回の河上祭は内容が充実し多くの成果をあげることができたと思いますが、反面、実行委員会の力量不足で期待した程の参加者を迎えることができなかった等の問題点が残りました（十五日の催しの参加者は約七十名、十七日は九十名、十九日は七十名程）。今後は実行委員会の活動をさらに活発化させて、実行委員会の力量を増し、質・量ともに更に充実した企画を用意して来年の河上塾生誕百周年に臨みたいと考えています。

河上祭はこれまでも東京河上会から援助を仰いできましたが、不況の影響でパンフレットの広告料が減り財政上の困難が増したため、今回河上塾記念会の方々にも御援助の依頼をいたしました。突然の失礼なお願いにも拘らず、私たちの予想もしない程の多勢の方々から多大の御援助を頂きました（具体的には五十六名の方々から合計二十二万三千円の御援助を頂きました）。また、併せて送られてきた各地の方々からの激励のお言葉に私たちがどれだけ励まされたかわかりません。

末尾で恐縮ですが、誌上を借りて厚くお礼を申し上げます。

河上博士をたたえる詩について

編集部

この詩は一九二九（昭和四）年七月一日付の「京都大学新聞」に載った。

河上博士に

田木 繁

その人は壇上に現れ その人は俺らの前に立つ
俺らは忽ち拍手の中に沸き返り 又忽ち鳴りをひそめる

その人はしやべりはじめる

その人はしやべりつゞける

その人の眉はあがり その人の瘠せた肩は突き出され

その人の枯れて澄んだ聲は

俺らの心々にしみわたる

その人は言ふ――

「もし大学にとゞまり

×××には×××に×××近く

×××する光榮を有したならば

少しも私は知らなかつたであろう

併し今私は労働者農民と共にあり

闘争のたゞ中であつて

ハッキリと知つてゐる

×××とは ×××とは

何者であるか……」

突然×××は中止を命ずる ×××は檢束を命ずる

×××は躍りかゝる 瘠せたる人の肩を掴む

その人を引つ立てようとする

おゝ その人を

俺らの河上塾博士を

俺らの中の最も誠実なる人格を

俺らの眼の前で……

それが俺らに黙つて見てゐられるか

俺らのために身をも職をも投げ出した

その人の

俺らの眼の前で引つ立てられて行くのを

それが黙つて見てゐられるか

それが俺らになんともないか

おゝ 見ろ

誰れ彼れの見境つかぬ××どもよ

遂に俺らが われと我が身が抑へきれず

夢中になつてたちあがり 壇上にかけてあがり

博士を奪い

博士を包み

博士の前に

真に頼み甲斐ある俺らであることを

俺らの腕に訴えて 腕に物言はせて

答へるのを

それから五十年近く経って、最近東京の会員野口務氏がこれを発見された。作者には長い間、気にかかつていた作品のようであるが、大分苦勞して伏字をおとされた。

10行目 行幸日、御座席、甚しく

11行目 拝顔

16行目 君主制、天皇

18行目 臨官、臨官

19行目 警官ら

32行目 警官

そして作者が野口氏に宛てた返信には、この詩の出た翌（或は翌々）月号の「文芸春秋」に、先生がこれについての簡単な感想を書いてくれた由を当時友人から聞いたことや、大切な先生のお言葉の出所は、残念ながら今日確めることができないことなどが付されている（当編集部で当時の「文芸春秋」に当って見たが、それらしいものは見付からなかった）。

大方御承知のことと思うが、作者の田木繁氏は本名笠松一夫、自筆の略歴によれば、明治四十年海門市生、昭和五年三高をへて京大独文科卒。在学中戦旗社並びに日本プロレタリア作家同盟に関係、昭和八十一年の間、大阪の工場地帯に住む。昭和十一年以降、故郷和歌山に帰り、現在の有田市に居を卜す。戦後昭和二十四年和歌山女専をふり出しにドイツ語教師となり、大阪府立大教授の現在にいたる、となっている（「田木繁詩集」現代思潮社 昭和四十四年）。

昭和四年の河上博士は、前年に京大を去り、静かなる書齋生活から、いよいよ街頭へ出ていくのである。その時、齢五十才。若き詩人田木繁は満腔の敬意をもって、この詩を捧げたのであろう。同じく昭和四年、この詩人は、よく知られている、拷問を耐える歌を「戦旗」に発表している。

生誕百年記念事業に関するアンケートの集計

事務局

前号でお願いしました掲載のアンケートにつきましては、多数会員より御回答をいただきました。厚く御礼申し上げます。（回答者数七十五名）

I 行事について

*講演会

*遺品展（府立総合資料館）

〃（都心デパート）

*シンポジウム

*会員交歓会

*法然院法要 募金

*その他

55名	73%
35名	47%
30名	40%
17名	23%
23名	31%
35名	47%
1名	1%

「先生の遺品に接し、法然院まで徒歩参り、公共施設で会員交歓会を開催し、先生の今日的意義について深く語り合いたい」

「都心のデパートは遺品展に不向き」

「講演会は若干ありきたりの感じ。遺品展は、前回より時がたっているのでは非」

「あまり派手なことやるのはいかがと思う」

「多彩にとりくむのがよい。但しアカデミックなもののオンリーにしない方がよい」

II 事業について

* 河上映画の製作

27名 36%

* 河上研究入門書の刊行

38名 51%

* 河上肇記念賞

39名 52%

* その他

4名 5%

「早く完全な全集の刊行をのぞむ」

「河上先生を知っている人に広く、想い出、印象、何でも話してもらい、又は書いてもらって、一冊の本にしたら如何」

「いずれも会が主体となってやることには消極的」

「いずれも資金が問題、それをどうして集めるか」

III 何月にやるか。

* 1月 18名	24%	* 2月 0名	0%	* 3月 1名	1%
* 4月 2名	3%	* 5月 4名	5%	* 6月 1名	1%
* 7月 2名	3%	* 8月 2名	3%	* 9月 0名	0%
* 10月 58名	77%	* 11月 1名	1%	* 12月 0名	0%

「十月をメイン行事として、その前に一、二回の飛び石番組をつくってはどうか。今年中に全プランを発表せよ」

IV 推進母体について

* 関西、東京別々に作る

14名 19%

* 関西、東京一本化したものを作る

43名 57%

* 作るときは委員を各界、各世代、広範に委嘱する29名 39%

* 作る必要なし、現在の事務局でやればよい 11名 15%

「一つの目的に母体は一つ」

「会の内情にうといので、関西、関東統一問題は保留意見、しかしできるだけ統一実行委員会の方をめざされたい」

「京都、東京の事務局で会員の意見をきいた上で、原案を作成し、両者で調整統一してやる方がよい」

「九州、中国、四国、東北、北海道に記念会支部を設置したらどうか」

「堀江氏とはどんな方ですか。どうして二本だてになるのですか。会員に事情を知らすべきだ」

「堀江氏との齟齬だの、調整だのというのは、何のことかわかりません。まだ動き出していない百年祭が、今から密室的なことでは、われわれはついていけない」

V 資金について

* 奉賛帳

35名 47%

* 記念品

49名 65%

* 色紙セール

30名 40%

* その他

13名 17%

「講演会やシンポジウムをやるだけなら、会員に臨時に特別会費を徴収してやれませんかしょうか」

「一口五・〇〇〇円程度、一口以上の募金」

「五〇〇円饅頭を一万個ぐらい作り、河上紹介パンフレットと一緒に、労組、民主団体に入れる」

「会員の数をふやし、貧者の一灯の会費をあつめる。小口の会費×多数の会員」資金

〔會員投書〕

—美術館—疎水—法然院への散策の提案—

拝啓 今年は殊外暑い夏でございます。皆様方お変わりございませんか。御機嫌お伺い申し上げます。

いつも会報をお送りいただき有難うございます。ささやかな家業に忙殺され、埋没している私は会報で教えられ、励まされ思い出しては「自叙伝」や「留守日記」などかじり読みしております。本当に感謝しております。今後も会報を続けていただくとお願いいたします。しかしあまり無理をなさぬように。

私事を申して恐縮ですが、この頃の若い人たちが、海外旅行などとパカンスを楽しむ風潮がありますが、私などにはそんな暇も金もなく、一寸うらやましく思いながらも、こんなことはかなえられそうもありません。いつも思っていることなのですが、岡崎（美術館）—南禅寺—法然院—吉田（河上先生旧居）といったコースをぞろ歩きして、先生を偲ぶささやかなツアーを会員の方々と楽しませていただくような計画は、いかがなものでしょうか。

肩のこることは性に合いませんので、落語にでてる長屋の花見のような気楽さで、皆さんと御同行できれば、さぞ楽しい一日を過ごさせていただきます。まことに勝手なお願ひでございますが、私もお手伝いさせていただきますから、事務局で御計画下されば有難いと思います。

だんだん世智辛く、生きにくくなっていくように感じられる昨今、河上先生を慕う会員の方々と親しくお話しをさせていただけるような催しも欲しいと思うのは、狭い見の私だけのこともかもしれませんが、御多忙のところ申訳ありませんが、一度お考え下されば有難く存じます。

気ままなことがかり申しましたが、一層の御健勝を念じ、失礼を顧みず一筆啓上申し上げます。どうぞお許し下さい。 敬具

事務局だより

◎山宣会が山宣虐殺五十周年記念事業を計画

過日山宣会より事務局宛に、次のような計画の案内がありました。

山宣会は会員、賛助会員百数十名、京都を中心に北海道から九州まで全国各地の方々を含み、「山宣研究」の刊行、講演会、研究会などを開催、宇治山宣会、長野山宣会とともに種々活動を展開しています。

明昭和五十四年は、京都第二区選出旧労働党代議士山本宣治が、右翼の兇刃に倒れ五十周年になります。

その記念事業として、次の企画を考えて、逐次取り組まれているとのことです。

- (一) 山本宣治著作集の刊行（日記、書簡、未発表論文などを含む）
- (二) 山宣記念館建設資金募金運動の開始
- (三) 「山宣研究」の定期的刊行（季刊）
- (四) 墓前祭（三月五日）、生誕祭（五月二十八日）ならびに研究会の開催
- (五) 山宣資料展（一週間程度、京都市内にて）

正に河上肇生誕百年と期を同じくしますので、当記念会としても、何かと御教示願いたいと思っております。

◎米国で出版された河上研究の本

さき頃、ハーバート大学出版部より刊行された Gail Lee Bernstein, "Japanese Marxist A Portrait of Kawakami Hajime".

H.U.P. 1976 を読む機会に恵まれた。全てを読むとかなり膨大な量になるので、今の所、半ばで静止状態であるが、河上を「マルクス主義への旅へ導く榎田民蔵」氏の評価が高くなっているのには感心させられた。

この榎田民蔵氏の『全集』が、このほど再刊されたのを記念し、七月十九日 氏の郷里、福島県いわき市において講演会が開催され、講演会は氏の長男克己氏（『全集』編者）が「全集刊行と父榎田民蔵」を話され、また、当会会員大島清氏（法政大学教授）が、「榎田民蔵の生涯とその業績」を話された。「榎田さんの生涯は、師河上肇の批判を通じて、日本のマルクス学を高めることに全力を傾けられた」との大島氏の指摘に「旅の塵はらひもあへぬ我ながらまた新たな旅に立つ哉」という河上の歌が思い出された。

講演会終了後、大島清、榎田克己両氏におめにかゝり、榎田『全集』発刊計画等の話があり「榎田『全集』は既刊の五巻の他、新たに補巻として『日記』『書簡』を集録する予定であり、現在の所『書簡』類がほとんどなく、もし、河上会の方で持参されてる会員の方がおられればお貸しいただきたい」との強い要望がありましたので、誌上にて、御協力をお願いします。持参の方は当会事務局まで御一報を。

◎当番日記

◆六月十六日 東京河上会の要請により大門上京、例会（於学士会館十八時）に出席、散会後、堀江邑一氏と生沼氏と二時間許り懇談したが、生誕百年祭の企画について堀江氏の意向に合致せず。結局生沼氏と小生とは当面東西の会が協力して、独自の計画を練り押し進め、堀江氏の企画は傍観するより他なしとの結論に達した（尚、堀江氏の考え方につき異議ある所は、東京河上会の承諾を得て小生名を以て、堀江氏に書簡を以て申し出てあります）。

◆七月九日十二時 京大楽友会館に於て「生誕百年を前にして当会の将来を考える」座談会を開催したが、出席者少数にて中止。

◆八月十四日 明日の名和統一氏の葬儀に参列出来ぬため、嵯峨釈迦堂に未亡人スガ子夫人を弔問、記念会と京大白川会の弔意を表して来た。スガ子夫人は時々法然院に参詣して頂いている。色々懐旧談を交して来たが、はからずも夫人は河上先生のお嬢さん羽村静子夫人と女学校が同窓で一緒に旅行などなさっている由、初耳であった。又、記念会の熱心な会員岩城牧さんが名和氏のお嬢さんである事も安井功さんから聞き及んでいる。こゝに謹んで冥福を祈る。

としよりの繰り言を云わしてもらえば、先年の展示会開催以来でも次々に人を失って来ました。菅原昌人氏、芝森雄氏、石川興二先生、最近の一年でも末川博先生、福井孝治先生、服部周平君、渡瀬譲君、小林直術氏、名和統一氏等々十指に余りそうである。いずれも河上先生の醫咳に接したゆかりの深い人々のみである。酷暑の中に故人を思う。身の弱りからであろうか。

◆八月十五日 名和統一氏三十日忌を終えられた挨拶状に添えて、スガ子未亡人から当会へ金五千元也の寄附がありました。

1965年創刊 只今 32号

京都に「煙」あり

戦前日本プロレタリア文化運動の生き残り11名（65〜75才）が出している異色の同人誌。埋もれた青春像の発掘を柱に「詩・歌・小説・エッセイもあり、各地・各界・各層からの便りを「声」欄に収めているのも特色。

A5版 60頁 頒価二〇〇円 千二〇円

「煙」 同人社

京都市中京区西ノ京南内町七一 児玉誠 方
電話京都八一―七六四六 振替京都一五六五三

編集部 の 線 言

身過ぎ世過ぎに忙しい編集部の面々への思い遣りからか、会報の発行は年一回でよいと申して下さる情深い会員もあるが、ハッキリした目的をもって、何かを仕出かそうという会でもなく、気を引くような催しをやることもない会なのだから、お一人様三千円の会費に兎合ったところで、年四回位会報をお届けするサービスは果さねばならないと思っております。また会員も増えてほしいと思えますから、決して押売りのつもりではありませんが、会員外の方にも、余り間をおかずに会報をお送りしておれば、きっと何かは入会していただけるだろうという勝手な期待もありますので。

今度が第七号、創刊号から、ずうっと續けてみたが、どれも満足な出来ばえではない。元々力のある編集者がいるわけではなく、おまけにいつも時間をやりくり算段しての編集・発送の作業、スケジュール通りに進んだためしがなく、エイままよとばかり、午後八時の制限時間ギリギリに郵便局の料金別納窓口にかけ込み、局員の小言に平身低頭し、八百通に別納スタンプを捺し、ホッとする。こんな非力と粗忽の様が、どの号にもよく出ています。本当に申し訳なく思います。

このようにやるけながらも年四回出そうという健気な編集部にも、以下のような「三つの願い」があります。

「「えらい人がたくさんおられる会だから、私などはすかしくて書けない」といわれないような誌面にしたい。

「「明治の人が多いから、われわれ若造は発言しにくい」といわれないような誌面にしたい。

「「河上肇に対するファン意識が強すぎて、なかなかとけこめない」といわれないような誌面にしたい。

編集部だけの思い込みかも知れませんが、いろいろ議論した結果のこと

とです。こんな考えで、及ばずながら努力していくつもりです。
御協力を心からお願ひいたします。

【編集後記】

◆ 久しぶりにペンをとる。と、思いがうまくペン先に伝わらない。言葉とは、ほんの三尺もすすまないのか。夢を見ているようにもどかしい。ふと、獄中に蟄居する河上さんもこんな気分を味わったのかと思う。書き道楽の彼のこと、我が身の顛落を思ふよりもまず、思いを伝え得ない喪失を感じたのではないか。自叙伝であまりにも饒舌な彼を見る毎、そのことを思う。

その河上さんも死後すでに三十余年、明くる年は、その人百年目のめぐあわせである。その人が再び「今」と相まみえる―はずなのだ。だが現実はどうなのか。残念ながら、そこで河上さんを待つものは、事もあるうに、彼自身が脱ぎ捨てた旅衣であるのだろう。そんなことにはしたくない。絶対に。しかし、何も語ってもらえぬ寂しさが、ある。死者は何も語らない。生者のみが語らねばならない。問答の意味がそこにある。多くを語り、おそらくはなお語り尽くせずに去った河上、彼を迎えるのに、毒ある饒舌をもってしたいと思うのだが。七号を重ねる会報、それへの危惧のみ載せてお届けするのが残念でならない。

最後に、津田青楓画伯が死去した。沈黙の輪が拡がり、継承されねばならぬ世代を感じる。(N)

◆ いまの日本に、革命は要るのか？ 要らんのか？ 要るとしたら、どんな革命が要るんやろ？ 革命のイメージが分裂して、惹きつける力が弱い。人々の心の中で、財の持つ力が大きくて、財の持つ力が大きいことの、人間としての都合の吟味が足らへんのところがうか？ 短い物差しで、遠くを測らんなんむずかしさか？ (O)